

図書館学

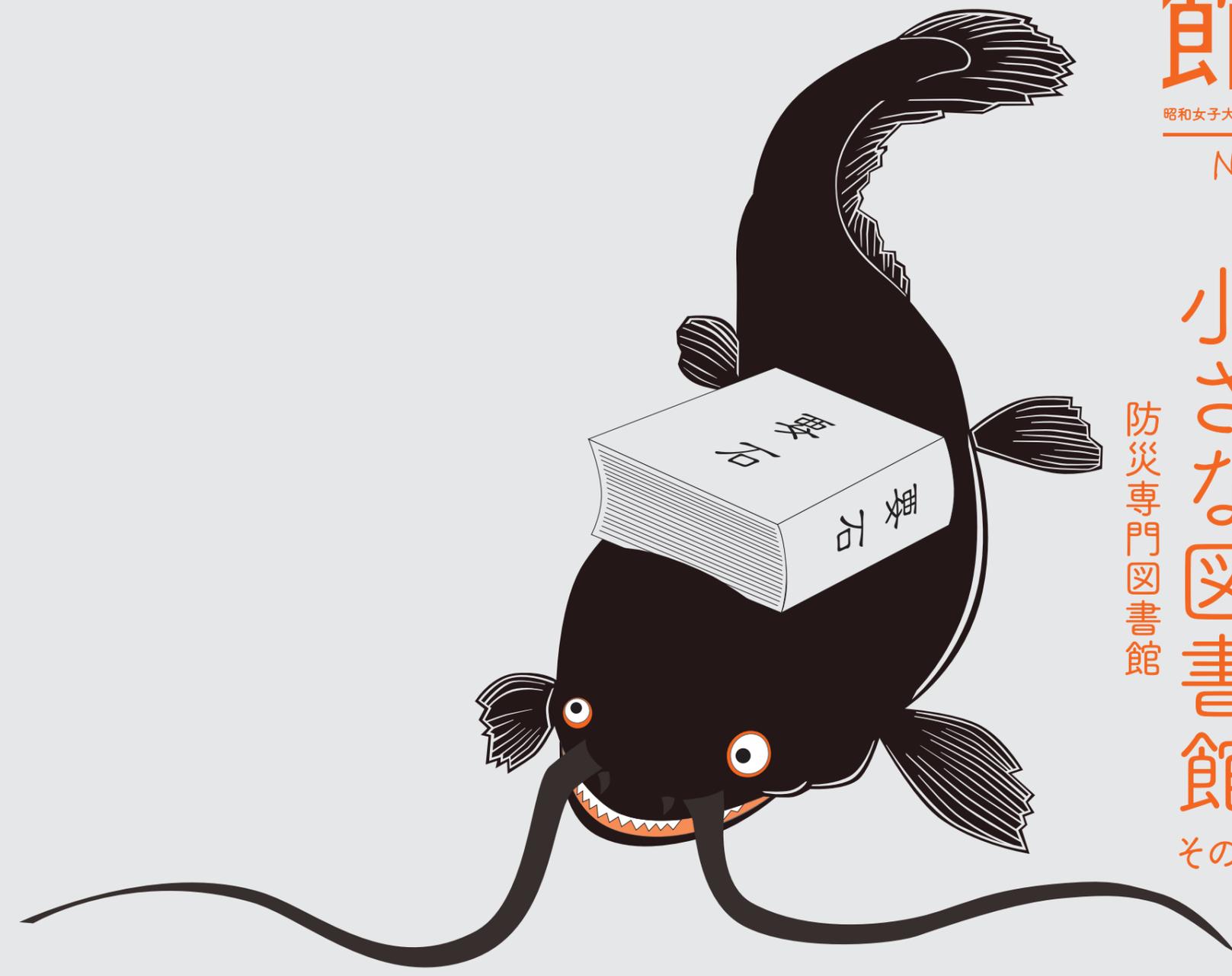
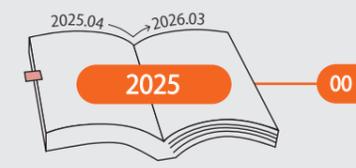
昭和女子大学図書館学課程ニューズレター

Newsletter

小さな図書館

防災専門図書館

その2



専門図書館としての 防災専門図書館

公益社団法人全国市有物件災害共済会
防災専門図書館
係長 矢野陽子



1 専門図書館とは

一般に図書館と言えば、自治体が設置する公共図書館を思い出される方が多いかと思います。また小学校から高校まで学校には図書室があったでしょうし、昭和女子大学に図書館があるように、大学には図書館が設置されています。これらのうち公共図書館は、図書館法のもとに設置され、学校は学校図書館法、大学は設置基準等によっています。

一方で「専門図書館」は、法律に定められたカテゴリではありません。それでは何をもちょう専門図書館とするのでしょうか。例えば『図書館用語集』四訂版(日本図書館協会、2013年)には、「特定の専門主題領域の資料を収集・整理・保管して、その専門領域の利用者の利用に供する図書館」とあります。つまり、箱(組織・施設)ではなく中身(書籍)によって区別しているわけですね。このような専門図書館は、例えば食をテーマにした味の素の文化センター食の文化ライブラリー、野球をテーマにした野球殿堂博物館図書室、旅をテーマにした旅の図書館など特定のテーマを持つ専門図書館があり、また、雑誌を収集する大宅壮一文庫や近代女性雑誌ライブラリー、漫画を収集する明治大学現代マンガ図書館等、雑誌・マンガといった特定の形態の資料を収集する図書館等もあって、枚挙にいとまがありません。全国にある専門図書館の情報を掲載した『専門情報機関総覧』(専門図書館協議会、2018年)に

は、昭和女子大学図書館も掲載されており、女性・ジェンダー問題、文学等の資料が主な収集分野であると記載されています。

2 防災専門図書館

防災専門図書館は、他の図書館と同様に資料を収集して、整理・保存し、閲覧提供していますが、専門図書館として、防災と災害だけに特化した資料約17万冊を所蔵しています。また防災に特化しているために、分類は日本十進分類法(NDC)ではなく、当館独自の分類を用いています。さらに、江戸時代のかわら版や蔵書の一部は、来館できない方や保存のためにデジタル化して図書館のホームページで公開しています。

当館は、昭和31年7月に東京都千代田区で開設しました。母体組織である公益社団法人全国市有物件災害共済会の公益目的事業として、約70年の歳月を公開型の専門図書館として活動してきました。そして当館は「防災等に関する資料の収集とその活用・発信を通じて、住民のセーフティネットに貢献する役割を担う」ことを理念として掲げているので、平日のみの開館ではありませんが、誰でも図書館を利用して防災関連情報を得られるように、入館に制限はありません。ただ、貸出は市役所等の関係者のみという制限があります。当館の資料は約7割が寄贈資料で成り立っており、灰色文献(一般に流通していない資料)が多くを占めます。さらに発行から時間が経過し入手困難な図書が多く、万が一

方不明になると同じ資料を再度得ることが大変難しいためです。

利用者は、幼児や生徒が親御さんと来館されたり、高校生が発表の下調べに来館されたりすることもあれば、大学生がグループで防災冊子を作るために何度も資料調査されたこともありました。当館職員も様々なアドバイスをし、できあがった防災冊子を受け取った時には大変感激したことを覚えています。一方で、企業の方が会社の災害時のBCP(事業継続計画)を作成するために資料を探しに来館された際、資料提供だけでなく計画作成にも大きく関わったこともあります。大学の教員からは、当館が70年に亘って収集してきた資料群を高く評価され、ぜひ組織的なつながりを持ちたいと希望され、連携協力協定を締結したこともあります。その大学とは協定締結後も、当館からは資料提供、大学からは研究成果をフィードバックしていただき、私たちはそれを利用者へ伝えるという充実した関係が続いています。

このように、当館には様々な方が来館されるので、そのレファレンス内容も多岐に亘っています。また、当館では災害を「人にとって災いがあること」としていますので、所蔵している災害の範囲が、地震や台風等の自然災害と公害・交通災害等の人為災害の全般に亘っていることもレファレンスが多種多様な理由でしょう。それゆえ私たち職員は、資料の提供は当然ですが、さらに信用のあるWebサイト情報等も駆使しながら、何かしらの答えを出すようにしていますし、さらには資料を介さず知識を

生かしてコンサルタントのようなことをすることもあります。利用者さんから「Webを含めていくら探しても分からないのです」と当館を最後の砦のようにして来館される場合もありますので、専門図書館の司書には「調べる」能力が強く求められます。私たちは日頃から新しい情報を求め、資料を探して入手し、それを利用者へ伝えることを大切に考えています。

3 なぜ 資料収集をするのか

「図書館」とはどのような施設でしょうか？その答えの一つは、図書館法の第一章第二条に「この法律において「図書館」とは、図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設で、地方公共団体、日本赤十字社又は一般社団法人若しくは一般財団法人が設置するもの」とあります。つまり、図書館法上では、ただ資料を収集しているだけでは図書館ではないし、民間企業の資料室も図書館ではない、ということになります。一方で防災専門図書館の場合は、資料を収集、整理、保存し、その資料は利用者の益となっており、かつ公益社団法人が事業とする施設であるため、「図書館」に該当しています。それゆえ、その活動は、図書館法第三条に「図書館は、図書館奉仕のため、土地の事情及び一般公衆の希望に沿い、更に学校教育を援助し、及び家庭教育の向上に資することとなるように留意し、おおむね

次に掲げる事項の実施に努めなければならない」とあるのに従うことになります。「次に掲げる事項」には「図書、記録、視聴覚教育の資料その他必要な資料…を収集し、一般公衆の利用に供すること」等、9項目の図書館事業が挙げられています。

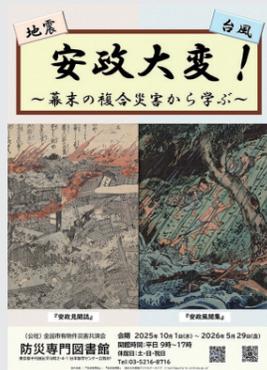
言い換えれば「図書館は資料収集をしなければならない」のですが、当館にとって資料収集をする目的はそれに留まりません。なぜならば、当館が収集した資料は命に関わる可能性があるからです。

行動心理学用語の一つに「正常性バイアス」があります。バイアスは偏重という意味であり、正常性バイアスとは、「私は正常である」と偏って思い込む心理を示しています。人は平穏な暮らしをするために安心したがるもので、それは正常な心の働きです。しかし、それが偏重すると悪い結果を伴う場合があります。2003年に韓国・大邱市の地下鉄で起きた放火事件は、この正常性バイアスが悪い方へ働きました。火災で車内に煙が充満してきているのに「こんな大火災が発生していたとは思わなかった」「みんながじっとしているから自分も」と車内に留まり初動が遅れたそうです。死者が多かった原因は別にありますが、通常の判断であれば煙が充満してくれば逃げましょう。それなのに「地下鉄で大火災はないから大丈夫」「周りの人が動いていないから大丈夫」と何の根拠もなく「大丈夫」と思い込んで動かないことを選択してしまいました。この危険な偏重に対して、危機感を抱かせるスイッチが「情報」になります。それは過去の経験であるかもしれ

ませんし、誰かの「逃げよう!」の叫びであるかもしれませんが。そして、当館で読んだ図書から得られた情報が命を助けることになるかもしれない。だからこそ私たちは、命を助けることができる資料を収集することを目的としているのです。

4 防災専門図書館の レファレンス

先述のように、当館には様々なレファレンスがあります。そのうちのいくつかを紹介しましょう。時々あるのが「○○へ引っ越したいのですが、安全ですか?」という質問です。2020年8月からは、転居先の住家の水害リスクは、不動産業者が入居手続き前に説明する責任が法的に生じていますが、自分で調べてみたい方が、当館にお問い合わせくださいました。この場合、転居先住所がわかりますので、当館資料を用いて過去の災害、そして地震の揺れやすさマップ等、複数の資料を利用して回答したりします。しかし「どこが安全ですか?」と漠然と尋ねられると、回答は大変です。地震に強くても水害に弱い地域があります。山地では土砂災害の危険がありますし、川沿いは水害に弱く、町中は交通事故が心配になります。ただでさえ自然災害が多い日本ですので、「完全に安全なところは実はないのですが…」と答えるよりほかありませんが、それで終わるのではなく、所蔵資料やWeb情報などから危険を知ることができるようになるように説明を加えています。



の差と言えるでしょう。

とはいえ、知る人ぞ知る図書館では、所蔵資料は死蔵してしまうことになります。そこで、年に1度のペースで大型の企画展を開催して、プレスリリースを発表するなど大々的な広報をすることで防災専門図書館の名前を広め、来館者を増加させようとしています。また、先述したように閉架式の図書館のため多くの図書は書庫にありますが、企画展を開催して書庫の図書を閲覧室に出し、当館はこのような貴重な資料も所蔵しているのだとPRする場にもなっています。

2025年10月1日からは企画展「安政大変!～幕末の複合災害から学ぶ～」を開催しています。当館の企画展は「〇〇災害から〇年」という周年災害で開催することが多いですが、それだけでは集客できないので、来館者が身近に感じる内容や、ホットな話題を組み合わせるようにしています。今回は、令和6年能登半島地震の後に起こった奥能登豪雨の記憶が新しいこともあり、170年前に起きた安政江戸地震と、その翌年に起きた安政江戸台風をセットにして「複合災害」をテーマにしました。このようにして開催する当館の企画展には、来館していただいた方に命を守る情報を伝えるという目的があります。そのため、企画展の構成は、前半が過去の災害を展示して、どのような被害があったのかを伝え、後半では、同じような災害が今起きたら、私たちはどうすればよいのか、備えをどのようにすべきかを学ぶような展示にしています。今回の展示も、前半は所蔵

するかわら版や資料等を利用して江戸時代(安政期)の災害について解説し、さらに現在まで日本で起きた複合災害の事例を蔵書とともに列挙して、決して複合災害が珍しいものではないことを示して、今後の災害対応として備えは、複合災害までも考えていく必要があることを展示しています。日常業務と並行して、全体の構成を考えて資料を出し、解説パネルを作成して展示するのは、かなりの労力が必要ですが、来館された方から勉強になった等の感想をいただくと、やはり企画展は大切だと実感します。

6 おわりに

『専門情報機関総覧』には、日本にある1,645館の専門図書館が列挙されています。みなさまが調べたいことがありましたら、マニアックな資料を収集している専門図書館でもぜひ調べてみてください。そこにはWebサイトにない情報が溢れていますので、新しい発見を得ることができるでしょう。



矢野 陽子 やの ようこ
食に興味があり、大学や大学院では中国の食物史、農業史を研究してきました。今も仕事のかたわら、休日は仲間と食や農業関連の漢籍・簡牘資料を読んでいます。味噌作りは冬の行事、燻製作りはたまに、塩麴は常備して、週末の家飲みを充実させるのが楽しみです。

専門図書館とは

矢野先生がすでに専門図書館について冒頭で説明してくださっていますので、少しだけ、「図書館概論」の復習の意味という意味でも、専門図書館について解説します。

日本において、公立図書館と私立図書館は図書館法、学校図書館は学校図書館法、国立国会図書館は国立国会図書館法で定められていますが、専門図書館全体を包括的に規定する法律はありません。その理由は設置の目的や運営形態が多岐に亘り、一つの法律として定めることが困難であるためです。

専門図書館は、調査機関や企業、各種団体が設置し、その専門分野に関する資料を収集し、主に設置機関の会員や職員が利用します。専門分野の関係者や一般の人々にも公開されている図書館も多く存在します。この度の「防災専門図書館」は、公益財団法人全国市有物件災害共済会により運営されている、防災、災害、減災に関する専門図書館であり、一般公開されています。

他にはどんな専門図書館があるのでしょうか。矢野先生が示してくださった『専門情報機関総覧』に加えて、東京都立図書館の「専門図書館ガイド」*を紹介いたします。「専門図書館ガイド」は、約450館の東京都内及び近県にある専門図書館等をキーワード等で検索できます。データの内容としては、機関名、住所、開館日時、蔵

書内容、サービス内容等々があります。もちろん「防災専門図書館」についても掲載されています。

ひとまず「専門図書館ガイド」を使って、あなただけのお気に入りの専門図書館をみつけてみませんか。そして訪ねてみてください。

東京都立図書館
専門図書館ガイド



*東京都立図書館「専門図書館ガイド」。
<https://senmonlib.metro.tokyo.lg.jp/2025,12,3>



池田 美千絵 いけだ みちえ
図書館学課程「児童サービス論」等を担当。『この本読んで!94号』(2025年春号)において、読み聞かせの授業についてのインタビューが掲載された。

掲載記事



荒井文子。「第19回 保育者のたまごたちと絵本」。(一財)出版文化産業振興財団。
https://www.jp-pic.or.jp/konohon/docs/konohon_94_web-pdf.pdf, 2026.1.14.

出版社からのレファレンスでは、災害の体験談をもとにして防災教育の書籍を作りたいと、来館されたこともあります。当館では、災害の体験談も大切な災害記録として収集していますので、水害で避難するときの話、避難訓練の必要性を実感した体験等々、要望に合わせて大量の文献を書庫から出庫しました。当館は閉架式図書館のため、利用者が蔵書検索をされた資料を出庫することもあります。一方で問い合わせ内容に合わせて、職員が資料を選書して出庫することも多々あります。東日本大震災関連だけで4,000冊を超える所蔵のため、その方が要望にマッチする可能性が高いからです。利用者は本当の狙いを直ぐには語られない場合が多いため、レファレンスでの聞き取りがかなり大切になってきます。

図書館の司書の方が、防災本セットを作って貸し出しをしたいので、選書の参考にどのような図書があるか調査したいと来館されたこともあります。防災本セットの対象年齢を尋ねて、絵本から小学生、中学生に合う図書を、当方で選んで閲覧いただきました。当館では防災教育の資料として様々な年代の方が読める資料を収集しているため対応可能だったレファレンスでした。

最後の事例です。実は、昭和女子大学で令和6年度に実施した「情報サービス論」の講義後、図書館の職員さんの案内で女性文庫等を見学する機会がありました。その際、防災の資料も女性目線のものが増えてきたことを話す興味をもってください

たので、後日、当館が所蔵する女性がテーマの資料一覧を提供しました。すると、先日メールがあり、昭和女子大学図書館でミニ展示「もしも?の時を乗り切るヒント～女性の視点から考える防災の知恵～」を開催したとお知らせくださいました。「資料を選定する上で大変参考になりました」と言葉があり、情報を提供して良かったと大変嬉しく思いました。具体的な問い合わせがあった訳ではないですが、情報提供という意味でこれも当館のレファレンスとして、また機関連携として大切な事例になりました。

これらレファレンスの際、私たちが大事にしているのは、できるだけ何かしらの情報は持って帰っていただくこと、そして最も気をつけているのは、命を左右することもあるので、正しい情報を渡すことです。

5 広報活動

先の図書館法に挙げられた実施すべき事項には「六 読書会、研究会、鑑賞会、映画会、資料展示会等を主催し、及びこれらの開催を奨励すること」もあります。当館では、資料展示会つまり企画展を開催しています。

小規模の専門図書館は残念ながらその存在が知られていないことが多々あります。当館も「(防災を専門って)そんな図書館あるんだ」「知らなかった」「もっと早く知っていれば」という数々の言葉を聞きました。公共図書館のように存在しているため当然と考えられている図書館とは雲泥

まず初めに、長い間お世話になりましたこと、心より御礼申し上げます。このたび退職を迎えるにあたり、皆さんに感謝の気持ちをお伝えしたく、この文章を綴りました。

私は昭和女子大学にて、主に司書・司書教諭の科目を担当してまいりました。この分野は、図書館にとどまらず、情報の管理と提供を通じて社会に貢献する、重要な役割を担っています。ですが、図書館は今もなお定まった姿を持たず、日々変化し続けています。皆さんが司書や司書教諭として定年を迎える頃には、その姿も今とは大きく異なっていることでしょう。

少し堅い話が続きましたので、ここで個人的な思い出を一つ紹介させていただきます。

皆さんは、夢の中で匂いを感じたことがありますか？ 私は一度だけ、そういう経験をしました。それは前職の大学図書館を退職し、本学で教員として数年が経った頃の夢です。私は地下の閉架書庫で、誰もいない中、一人書架の整理をしていました。そこは静まり返り、冷たく乾いた空気に満ちた空間。そして、夢の中であの懐かしい「カビの匂い」を感じたのです。

この作業は、開館直後のブックポストの本の返却の際にも行われ、それ以外に職員が毎日少しずつ分担して進めていました。周囲は見渡す限りの書架。背表紙の所在記号ラベルを確認し、順番通りに並んでいるかを確認。剥がれ

たラベルや傷んだ本もチェックします。地味で、人目にもつかず、身体的にも負担が大きい仕事です。正直、嫌がる職員もいました。

でも、私はあの静寂な空間で黙々と作業する時間が好きでした。集中すると、頭の中が空っぽになって、終わったときには強い開放感を感じました。今思えば、事務作業の良いリフレッシュだったのかもしれません。

図書館には、カウンター業務以外にも多くの見えない仕事があります。とりわけ、このような地味な作業こそが、図書館の「本を発見する」システムを支えているのです。記号が正確でなければ、利用者は本にたどり着けません。私は授業の中でも、教科書には書かれていない図書館の裏側の話をできるだけお伝えするよう心がけてきたつもりです。

これから皆さんが図書館あるいは学校図書館で働くことになったとき、思いがけない課題や困難に出会うかもしれません。でも、学んできた知識とスキルとともに、常に自らをアップデートしながら、未来の図書館を築いていってほしいと願っています。

最後に、これまでのご縁に心より感謝し、皆さん一人ひとりのこれからの人生が豊かで実りあるものとなることをお祈り申し上げます。

本当にありがとうございました。

図書館学課程を 支えてくださった先生からの message



田中均 たなか ひとし
前職は大学図書館司書、前々職は書店員、どちらも人に本を届ける仕事です。文には「書架チェックが好きでした」と書きましたが、一番好きなのはカウンターでの利用者対応です。退職後はどこかの図書館でボランティアをやると思います。ようやくカウンター業務に就けます。



塩谷京子 しおや きょうこ
静岡市在住。静岡市小学校教諭／関西大学初等部(中高等部兼務)教諭／司書教諭を経て、現在は、学校現場への指導助言を軸に、これから教師を目指す学生さんや学び直したいという現職教員を対象に大学等で講師を務めています。

司書教諭資格取得科目のうち、「学校経営と学校図書館」「学習指導と学校図書館」「読書と豊かな人間性」「情報メディアの活用」の4科目を担当いたしました。という訳で、資格取得を目的としている学生さんとは、かなりの時間を過ごしていることとなります。資格取得の科目ですので、知識・技能を習得することはもちろんですが、卒業単位外の科目を取得しようという意欲に対して、プラスαを意識して授業を組み立ててきました。授業では、このプラスαを伝える時間はありませんでしたので、「メッセージ」という場を作ってくださいことに感謝いたします。

私は、昭和女子大学で、8年間非常勤講師を務めました。その間に、学習指導要領の改訂、コロナ禍、GIGAスクール構想など、教育現場に新たな波が訪れました。児童・生徒は、一人1台のタブレットを持っており、日常生活を見渡せば、大人も子供もスマホなしでは生活が難しい状況にあります。

情報社会で生活しているから、たくさんの方に情報に囲まれていると思いがちですが、フィルターバブル現象という視点から見ると、自分の好む情報だけに囲まれて生活している状況も浮かんできます。

まずは、学校現場のこうした環境の「変化」、そして現場の「今」を捉えることを、授業に組み入れました。その際、学んで得た知識・技能と自身の体験とつなげるために、中高校時代の体験を思い出したり、つなげたことから生まれた気づきを対話したりする時間を設けました。対話をする中で自分にはない視点に出会えたり、そこから新たな興味が生まれたりすることで、受け身ではなく、主体的な学びになっている自分を実感してもらえたら・・・という思いがあったからです。

そうした上で、多面的な方向、つまり担当した4科目それぞれの視点から、学校図書館の活用をみたときに、何が必要なのか、大切にすることは何かを、自分自身で考え、表現していくことを重視しました。

このように、知識と体験をつなげて感想や考えをもつことは、小学校に入学したばかりの1・2年生から国語科で段階的に学ぶことの一つでもあります。この時の体験は、直接体験だけでなく、もちろん、間接体験や擬似体験も含まれます。

感想や考えはどこかに載っているのではなく、授業で得た知識と自身の体験と結びつけて湧いてくるものだけということ、実感を通して理解していくことは、大学生にも繰り返し必要であると考えています。その上で、情報と情報をつなげて考えを導く、事実をもとに考えを述べるなどと、抽象化した概念の獲得へと発展させたいと考えたからです。

抽象化した概念をもとにした大きな方向性が描けたら、実際に、学校に赴任した時、司書教諭として辞令を受けた時には、～をやってみたい、～してみたいなど、具体的な方策がいくらでも浮かんでくるのではないのでしょうか？(授業では、バックキャストという手法を使って扱いました。)

社会人となり、もし、目の前のことで行き詰まったら、ぜひ、大きな方向性をイメージしてみてください。その時に、この科目に限らず、大学での学びが生きてくるはずですよ。

図書館サポーターの活動

図書館サポーターは企画を考えたり、イベントに参加したりと学生が主体的に活動しています。主な仕事としては広報活動、本の展示、秋桜祭への参加に分けられます。

広報活動では、ポスター作成やブログでの活動内容の発信を行っています。ブログでは図書館にあるサポーター専用ラックに展示している本についての紹介をしています。

本の展示では、サポーター専用の本のラックを毎月更新したり、POP作りもサポーターが行ったりして、利用者を楽しんでもらえるように工夫しています。サポーター専用のラックコーナーは貸し出し中になっていることが多く、学生に興味を持ってもらえていると感じていて、図書館サポーターの活動は、今まであまり読んでこなかったジャンルの本に興味を持ってもらえる機会にも繋がると考えています。



秋桜祭への参加

サポーターは秋桜祭へも積極的に参加し、毎年テーマを決めた本の展示やワークショップを行っています。

例えば、2024年度には、「一日のルーティン」をテーマにした本の展示を行いました。サポーターたちはそれぞれの一日の過ごし方とそれに合わせた本を選び、一日を朝、昼、夜に分けて、時系列に本を並べるなど、展示方法を工夫しました。ワークショップでは消しゴムはんこを使ったオリジナルカード作成も行いました。展示を見てくださる方に本の紹介もしました。そんなコミュニケーションを通じて、共通の話題や新たな発想が生まれたことも強く実感しています。



地下の書庫の高さは地上の一階分の高さの3分の2しかない。天井を低くすることで床面積を増やし、本をできるだけ多く蔵書できるようにし、一番上に置いてある資料でも取りやすいようにしているそうだ。取りやすい高さに配置することで、職員が請求された資料を早く取って利用者のもとに届けられることに繋がる。利用者により良いサービスを提供するにあたってとても大切なことであると思った。(K・S)

国立国会図書館の「図書館側が資料の価値を決めない」という考え方が非常に重要だと感じた。刊行当初はそれほど重要だと感じられていなかったものも、時間が経つと貴重なものとなり、特定の分野・研究対象によっては非常に貴重な資料である可能性もある。職員の方も同様の意識を持って働かれていると伺ったが、これは図書館に関わるすべての人が持つべき認識だと思った。(佐久間みずほ)

書庫内を見学しているときに数名パソコンを使って働く人を見かけた。地下書庫で働く人たちにも地上の光を届けるために「光庭」というものが存在する。光庭は地下8階から地上まで階段でつながっていて、地上から光が入ってくるようになっていた。階段がジグザグと上まで続いていて、アートみたいだった。(児玉明優)



国立国会図書館体験記

地下書庫には水を持ち込まないのももちろん、火災時でも、本館では二酸化炭素ガス、新館はハロンガスを使い酸素濃度を下げて消火を行う。資料の複製や、書庫に持ち込める袋にいたるまで、全てが資料を守るためであり、資料を後世に残すためという考えが徹底されている。無駄がなく、美しいと感じた。(H・I)

書庫に入る際は、私たち見学者は靴にカバーをかけ、職員の方も上履きに履き替えるなど、靴の汚れを持ち込まないようにしていた。また、書庫内ではボールペンの使用を禁止するなど、資料を汚すことがないように徹底していた。さらに、書庫内にトイレはなく、火災の際はスプリンクラーの代わりに、酸素濃度を下げる装置を使うというお話を聞き、紙の資料を濡らさないための対策をしていることがわかった。(星野名菜)

国内の全ての出版物を網羅的に収集する国立国会図書館ではスペースが足りないことが課題になっている。古い資料をデジタル化したり、本館だけではなく、関西館や新館にも資料を保存するスペースを確保したりしている。関西館では600万冊の資料が収集でき、新館では50万冊の資料が収集できる。本館と合わせると1100万冊もの資料が収集できるようになっている。多くの資料を保存している国立国会図書館の工夫や努力を窺うことができた。(伊古田愛理)

印象に残ったのは、増え続ける資料の扱いである。国立国会図書館には日本で出版されたすべての本が集められるため、その数は日々膨大に増え続けている。結果として収納場所が限界に近づくため、資料は適宜移管され、東京には新しいものを中心に残し、その他は大阪などに移されるという仕組みになっていると聞いた。特に政治関係の資料や最新の出版物を東京に残すのは、国会議員や研究者がすぐに利用できるようにするためであるという説明が印象的であった。東京は日本の核を担っていることを改めて実感した。(N・K)

国際子ども図書館体験記

児童書研究資料室の片隅にカード目録があって、歴史を感じた。授業で取り扱った際、現在ではあまり残っていないと聞いていたので、実際に見つけた時に驚いた。さまざまな言語のカード目録が鉄の棒に通されていた。貴重なものを見ることができ非常に嬉しかった。(H・T)

明治39年に帝国図書館として建てられた部分は、レンガ造りで壁の中も全てレンガが詰まっており、レンガを縦、横に交互に並べるフランス積みと呼ばれる方法で造られた。それに対して昭和4年に増築された棟は、レンガではなく鉄筋コンクリートで建設され、レンガに似たタイルを使用しており、さらに積み方がフランス積みではなく一列ごとに縦、横と交互に積むイギリス積みと呼ばれる別の方法だったことを知った。速くからでは全く分からなかったのですが違いを知ることができて良かったと思った。(M・M)

印象的だったのは、「子どものへや」の光天井が、授業で見た映像よりも温かい光だったことだ。あらゆる方向に光が差し、どこにいても影で本が読めなくなることがないように工夫されている。温かみのあるライトでリラックスできる空間になっていることは、実際に見学して初めて実感できる。(永峯愛子)

帝国図書館時代の様子が分かる物が展示されていた。何階にもわたる閉架書庫から、本をすぐに持ち出すことができるように作られた本棚専用のエレベーターや当時使われていたカード目録が入った棚など、戦前、日本の図書館がまだ市民に開かれたものではなかった様子が窺える物も残っていた。(鶴沼美咲)

現代的な廊下から見る当時の窓はとても幻想的だった。また、エントランス近くの大階段から見えるシャンデリアや手すり、扉は当時のものを使っているそうだ。手すりには安全のためにガラスでカバーが施されていて、現代的な部分も見えた。また、扉には「おす登あく」の文字が書かれていたのも印象的だった。(M・H)

国際子ども図書館は、本の貸し出しはできない。それは、自分の家の近くの図書館を使ってもらうためであり、図書館の使い方を学んでもらうためでもあった。本だけではなく、図書館と子どもを繋げていく方法に大変な感銘を受けた。(K・T)

ビブリオバトルへの準備

2024年度は昭和女子大学でビブリオバトルの全国大会が開催されたこともあり、ビブリオバトルに向けた準備や運営への協力も行いました。ビブリオバトルの円滑な運営のために何度もミーティングを行い、開催に向けて準備を進め、ビブリオバトルの参加者に配るプチギフトも作成したりしました。ビブリオバトルの全国大会に携わることで、改めて本の魅力を再発見したり、自分の言葉で伝えることの大切さにも気づくこともできました。

私もサポーターの仕事を通して、自分の言葉で本の魅力を伝え、利用者にも多様なジャンルの本に触れてもらえるように努めていきたいです。

レンガ棟はルネッサンス方式を取り入れているというお話から、近代化を目指して先進国のやり方から学んでいたことを見ることができ、3階ホールにあるシャンデリアは、戦時中に回収されたものの回収後すぐに終戦を迎えたために傷ひとつなく返ってきたそうだ。当時の日本を覗き、情勢を読み取ることができ、図書館としての役割以上の面白さがあった。(Y・M)



図書館サポーター体験記

伊古田 愛理 いこた あいり

人間文化学部日本語日本文学科 2年。図書館サポーターのリーダー。趣味は読書。幼い頃から読書が好きで、幅広いジャンルの本を読んでいる。好きな小説は住野よるの『また、同じ夢をみていた』。司書の資格を取るために勉強中。

司書資格取得者数・司書教諭単位修得者数

		令和4年度卒業生		令和5年度卒業生		令和6年度卒業生		令和7年度卒業生	
		司書	司書教諭※	司書	司書教諭※	司書	司書教諭※	司書	司書教諭※
人間文化学部	日本語日本文学科	23	6	20	2	21	1	28	4
	歴史文化学科	9	0	9	1	8	0	7	0
人間社会学部	心理学科	4	0	4	0	7	0	5	0
	福祉社会学科	0	0	0	0	0	0	0	0
	現代教養学科	4	1	6	0	3	1	1	0
	初等教育学科	0	11	2	8	0	11	0	10
生活科学部	環境デザイン学科	0	0	1	0	0	0	0	0
	健康デザイン学科	0	0	0	0	0	0	0	0
	管理栄養学科	0	0	0	0	0	0	0	0
	食安全マネジメント学科	0	0	2	0	0	0	1	0
グローバルビジネス学部	ビジネスデザイン学科	0	0	0	0	1	0	2	0
	会計ファイナンス学科	0	0	1	0	0	0	2	0
国際学部	英語コミュニケーション学科	0	0	5	0	0	0	4	1
	国際学科	0	0	0	0	1	0	1	0
	国際教養学科	—	—	—	—	—	—	0	0
	国際日本学科	—	—	—	—	—	—	0	0
大学院		0	0	0	0	1	1	0	0
合計人数		40	18	50	11	42	14	51	15

※司書教諭は、単位修得済みの資格取得見込者数。 R5.3.16時点 R6.3.16時点 R7.3.16時点 R8.3.11時点

図書館学課程科目履修者延べ人数

		令和4年度履修生		令和5年度履修生		令和6年度履修生		令和7年度履修生	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
人間文化学部	日本語日本文学科	209	194	216	252	238	284	267	245
	歴史文化学科	96	110	77	128	46	158	94	189
人間社会学部	心理学科	35	35	44	38	39	29	30	27
	福祉社会学科	2	1	0	1	1	0	4	5
	現代教養学科	36	32	21	28	20	21	18	24
	初等教育学科	46	15	30	20	27	30	52	51
生活科学部	環境デザイン学科	9	6	7	3	4	1	4	2
	健康デザイン学科	0	2	2	3	1	3	3	1
	管理栄養学科	0	0	0	0	0	0	0	0
	食安全マネジメント学科	8	11	10	4	7	5	4	3
グローバルビジネス学部	ビジネスデザイン学科	2	7	6	13	7	4	12	4
	会計ファイナンス学科	6	8	6	10	11	11	12	9
国際学部	英語コミュニケーション学科	23	39	34	15	22	18	16	13
	国際学科	4	2	3	7	12	9	5	2
	国際教養学科	—	—	—	—	—	—	0	0
	国際日本学科	—	—	—	—	—	—	0	3
大学院		0	0	1	3	1	0	0	3
合計延べ人数		476	462	457	525	436	573	521	581

※ひとりが関係科目を2科目履修した場合は2名とカウント

昨年度に比べ、資格取得者は増加した。そして履修者延べ人数も増加していた。履修者自体の増加も影響しているが、学生が複数の科目を履修し、資格取得に向けてより学びを深めているといえるだろう。

近年、デジタルや情報処理能力の向上の意識が高まっている。各学科での学びの中でもデジタル化が進み、ノートパソコンやデジタル端末を片手に授業を受講する

ことは、もはや当たり前になっている。図書館学課程では、資格取得をめざす過程でパソコンに触れて学ぶ機会が多くある。レファレンスサービスに必要な技術はもちろんのこと、データベースへのアクセスや情報システムの知識も身につけておく必要がある。その資料を探す際の情報処理能力は、資格取得のためだけにとどまらず、他の授業にも活用されているはずだ。

授業のレポートや卒業論文の執筆で資料を探す際に、すぐに実践できるだろう。そして、他の授業での学びが司書または司書教諭資格取得の課程に活かしていることも事実である。資格を取得する過程でも、あらゆる学びに触れ、大学生活そしてその先も豊かにしてくれるのではないかと。

(星野智美)

2025年度の開講科目 (単位)

図書館概論	2単位
生涯学習概論	2単位
図書館情報技術論	2単位
図書館制度・経営論	2単位
図書館サービス概論	2単位
情報サービス論	2単位
児童サービス論	2単位
情報サービス演習A(レファレンスサービス)	1単位
情報サービス演習B(情報検索)	1単位
図書館情報資源概論	2単位
情報資源組織論	2単位
情報資源組織論演習A(目録)	1単位
情報資源組織論演習B(分類)	1単位
図書館サービス特論	1単位
図書館情報資源特論	1単位
図書・図書館史	1単位
図書館施設論	1単位

必修科目 2 2単位
選択科目 2 単位
合計 2 4 単位

学校経営と学校図書館	2単位
学習指導と学校図書館	2単位
学校図書館メディアの構成	2単位
読書と豊かな人間性	2単位
情報メディアの活用	2単位

合計 1 0 単位

講義	11~9科目	20~18単位	300~270時間
演習・実習	2~4科目	4~6単位	60~195時間
		合計	360~465時間

2025年度の担当教員

基礎科目	池田 美千絵
	田中 均
	田中 均
	山口 洋
図書館サービスに関する科目	霜村 光寿
	横谷 弘美
	池田 美千絵
	横谷 弘美
図書館情報資源に関する科目	池田 美千絵 田中 均
	霜村 光寿
	田中 均
	池田 美千絵 山口 洋
選択科目	田中 均
	三野 行徳
	三野 行徳
	霜村 光寿
山口 洋	

塩谷 京子
塩谷 京子
田中 均
塩谷 京子
塩谷 京子

編集 池田美千絵 星野智美 川口華織
デザイン 鷺野宏デザイン事務所
2026年3月31日発行(年1回発行)
昭和女子大学図書館学課程
東京都世田谷区太子堂1-7-57
昭和女子大学日本語日本文学科内